

彼女が「家」と呼ぶ歩道 徐 華偉（フィリピン）

ある日の帰宅途中に、マニラの自宅近くにある掘っ立て小屋のそばを通った時、いつものように歩道を走り回って遊ぶ、ものすごい数の路上生活者の子どもたちに出くわしました。傍らでは、親たちが、生气なく歩道脇に小物や菓子を並べて売ったり、洗濯したりしていました。あの子ども数からすると、いつまでも洗濯が終わらないのではと思われま

す。
突然、歩いている私の前に女の子が飛び出してきました。名前を尋ねると、ジーナと答えました。以前からそこを歩くたびに、きょうだいと思われる子どもと歩道で遊び回るのがよく見かけていた子でした。子どもたちは、通行を邪魔されてぶぜんとする歩行者など気にかける様子もなく、叫んだりはしゃいだりと、どの子も相当なわんぱくでした。

少し時間があつたので、私は彼女に即席でインタビューすることにしました。彼女はきょうだいの上から2番目とのことでしたが、明らかに1番大人びていました。毎日何をしているのかと尋ねると、困惑した目で私を見返しました。そして、ただきょうだいと時間を過ごすのだと言いましたが、何をして過ごすのか詳しく聞くことはできませんでした。

短い一問一答の会話を続けていると、ジーナが脇見をして突然走り去り、すぐに小さな女の子を連れて戻ってきました。その子は誰かと尋ねると、妹のレニーだと答えました。私はその子に、ジーナにしたのと同じ質問をしました。案の定、レニーからは同じく困惑の表情が返ってきたばかりか、返事さえありませんでした。彼女はジーナに比べておとなしそうだったので、質問の意味が通じなかったのか、単に言うことがなかったのかは分かりません。

さらにジーナと話を続けていると、彼女より少し年長の男の子が、文字通り飛び込んできました。彼は周囲を跳び回ったり、私をじろじろ見たりして、私がジーナに何を話しているのかと興味深そうにしていました。私が、あなたは誰かと尋ねると、ジーナの兄のパトリックだと答えました。彼はとても落ち着きがなく、おとなしい下の妹に比べるとエネルギーの塊のようでした。

ほかのきょうだいと比較するために、パトリックにも、毎日何をしているのかと同じ質問をしました。彼は興奮して「家を建てているんだ」と答えました。彼は何を言っているのだろうと、私は周囲を見渡しました。建築現場のようなものはどこにも見当たらないので、どこで家を建てているのかと尋ねると、彼は歩道脇に積み上げられたベニヤ板を指さしました。私はただほほ笑み返すしかありませんでした。しばらくすると、恐らく飽きたのでしょう。彼は急にその場を離れて、鬼ごっこを始めました。

日が暮れてきたので、私はジーナに最後の質問として、ほかの家族はどこにいるのかを尋ねました。すると彼女は、父親は自転車タクシーでお金を稼ぎに行っていると答えました。それから、少し離れたベンチに座ってそれぞれに赤ん坊を抱いた2人の女性を指して、

右側にいるのが母親で、抱いているのは1番下の赤ちゃんだと言いました。最後に、歩道の脇で大量の洗濯をしている大柄な年配女性を指して、あれがおばあさんで、家族みんなの洗濯をしているのだと話しました。ジーナの母も祖母もまた、歩道でタバコやキャンディー、スナックなどを売っていくばくかの収入を得ています。

私は子どもたちに別れを言って家に帰りましたが、あの子どもたちは大きくなったらどうなるのだろうと考えざるを得ませんでした。大学はおろか、中学までも行けるかどうかわかりません。こういった子どもたちは、大人になると大抵の場合、ちょっとした盗みを働いたり、麻薬常習者になったり、もっと悪い場合には身体的・性的に搾取されたりすることが多いようです。ジーナとその家族が「家」と呼ぶ歩道の先で、彼女たちを待ち受けているのはどんなことでしょうか。将来のことは誰にもわかりません。